

第 4 節

ユージン・ナイダの聖書翻訳論

保守主義神学・現代福音主義と構造言語学との相同的親和性

前節まで、福音主義と自由主義神学、これら両者を生み出した分裂生成的な展開がアメリカ合衆国の神学の中で生じたことについて概観してきた。これとほぼ同時期、特に19世紀末から20世紀の初頭にかけて、福音主義・原理主義と同じく、ことばを客観的な対象として捉え、それを科学的に分析することを旨とする構造主義言語学が、ボアス、サピア、ブルームフィールドなどによって、19世紀的な文献学、つまり旧套の解釈学的な文献学と対峙するかたちで形成され、保守主義神学・福音主義と構造言語学との間に一定の相同的な関係が切り結ばれることとなる。

本節では、構造主義言語学との邂逅を果たした聖書読解法として、特にユージン・ナイダ（1914～2011年）の聖書翻訳論、その「動態的等価性」という視座に焦点を当てる。そして、それが、深層構造に普遍的意味論を据え、表層構造を各々の言語で観察される文に対応させるという（生成文法的な）構造分析の枠組みに基づいて進行した翻訳論であること、したがって、ナイダの等価理論・翻訳理論は、歴史や時代によって変わることはない超越的な人間性、人間の普遍的な意味論を前提とし、そのかぎりにおいて「語用論なき言語理論」、つまり語用ではなく、意味の領域に言語の本質を見い出す神学的・超越的な言語論であることについて詳述する。

第4節第1項 SIL (Summer Institute of Linguistics) およびWBT (Wycliffe Bible Translators) の宣教と翻訳：あるいはイーミックの言語学／人類学

SIL／WBTにおける聖書翻訳の近代言語イデオロギー

はじめに、ナイダが所属したSIL (Summer Institute of Linguistics／夏期言語学研究所)、および、その分身であるWBT (Wycliffe Bible Translators／ウィクリフ聖書翻訳協会¹²⁵)、その組織的様態と翻訳=伝道理念について概観しよう。

最初に、SILの成員の多くは同時にWBT (ウィクリフ) の成員でもあることを注記しておく。実際、SILの成員はアメリカや西欧諸国、韓国などの本国ではWBTの成員と見なされており、これらの「北」の富裕な「先進国」で聖書翻訳者として寄付を募る「宗教的・布教的」活動に従事している¹²⁶。他方、同一の人物たちが、パプア・ニューギニアなどホスト国では、WBTではなくSILの成員として——つまり、それらの「発展途上国」で、放っておけば国家から疎外・弾圧されていると感じかねない「部族」(少数民族)が、過剰ではない程度の民族的誇りと識字能力を持った国民となることに貢献することにより、ホスト国家の政府を助ける、世界規模で活躍する科学的な識字・言語学に関するNGO (特に「宗教・布教・伝道」には関わらない組織) であるSILの一員として——自己呈示しているのである。現地政府と契約を交わすのはWBTではなくSILであり、その契約書ではキリスト教の文献が翻訳されることへの言及はあったとしても、たとえばペルーにおけるようにSILの活動をめぐって政府とSILとの間で緊張含みの関係がある場合などは、契約書ではSILの作業のキリスト教 (の布教) に関わる側面は、非常に薄めて書かれている可能性が指摘されている (Handman, 2015: 76)。

Handman (2007: 171-174) も説くように、SIL／WBTでは、母語 (mother tongue) は「心のことば」(heart language) とも呼ばれ、母語でしゃべることが知性だけでなく感情や意志も含む全人的な営為、いわば心声を発することであると解釈されているようである。こうして、パプア・ニューギニアなどでは、非常に広く使われている混淆的な接触言語であるトク・ピシン語訳の聖書 (*Buk*

Baibel) が広く入手可能であるにもかかわらず、SIL/WBTはトク・ピシン語のような「交易語」(trade language)は、人びとの魂に直接、話しかける言語、魂の言語(heart language)、すなわち母語とはなりえないと見なし、母語=民族諸語への聖書の翻訳を行っている¹²⁷。SIL/WBTによる翻訳実践の背景には、明らかに、母語を称揚する福音主義的言語観¹²⁸、近代プロテスタント・ナショナリズムが横たわっている¹²⁹。SIL/WBTの宣教師たちは母語に備わった内面性と真正さが交易語には欠けていると考えており、(異教徒たちが自らの宗教、価値観、文化的アイデンティティを内面化した媒体であると宣教師たちが見なしている民族語=土着語=母語による宣教・改宗ではなく) 交易語=混淆変種による宣教・改宗は、(永続的なキリスト教徒ではなく) 不安定な混淆的宗教ないし名目のみのキリスト教徒の形成に繋がると——言語の様態は信仰の様態と類像的な関係にあると——信じているのである。言うまでもなく、トク・ピシン語のようなピジン/クレオール語は、多数の民族言語共同体にまたがって使われ、その境界はどう見てもはっきりしないものであるのに対して、民族言語はたった1つの民族言語共同体によって話されているとイデオロギー化されがちである。したがって、上記のような翻訳実践とそのプロテスタント的=近代ナショナリズム的イデオロギーは、民族や言語の個別化、可算化、実体化へと直結する傾向を示しているといえる。

つまり、母語=民族語は、福音活動の標的となるべき人びとを離散的な集団へと範疇化する主要な手段となっており、母語——すなわち個人的な、内面化された言語的な魂=精神と見なされたもの——を共有していることが社会文化集団の真正な成員を決定し、母語の共有によって人びとは可算的な集合・集団へと編成されるのである。したがってSIL/WBTにとっては言語、特に少数言語などの民族言語が離散的なものであるという信条は、その福音活動の基底に位置づけられるものとなっている。たとえば、パプア・ニューギニアのSILの現地調査を行った上掲(p. 89)のCourtney HandmanからKeane(2007: 44)が得た情報によれば¹³⁰、SILは黙示録に基づき、千年王国は、聖書が地上の全ての言語へと1つ残らず翻訳されるまで到来しないと信じている。これが含意するように、SILの教義によれば、世界は同類の可算的な物(諸言語とその話者たち)の閉集合から成っており、上記の企ては完了可能であると想定・想像さ

れているのである。このようなイデオロギーを背景として、SIL/WBTは、危機に瀕した言語の数を数え、世界に言語が6,000あるとか、そのような、インターネットなどをとおして現代世界に広く流布する数値、データ、言説を生み出す最も重要な主体・機関の1つとなっている。(広く知られているように、SILは言語多様性に関する最も包括的な知識の集積である『エスノログ』(Ethnologue; www.ethnologue.com)の編纂の責任を負う機関でもある。)

たとえば、翻訳プロジェクトを始める前にSILは、言語使用のドメインと方言的変異の概要を把握するため社会言語学的な調査を行うのだが、SILはしばしば1つの言語のいくつかの方言をまとめて1つの翻訳を行い、SILの翻訳の正書法はそれらのうちの1つの方言の発音に対応したものとなっている。パプア・ニューギニアなどでは、SILの翻訳した新約聖書のいくつかはキリスト教への改宗の標的となっている民族言語集団によってはほとんど使われていないのだが、SILの翻訳者たちは、これは、それらの集団が自分たちのものではない方言で書かれた聖書を読むことを拒んでいることに起因していると考えているようである。そして、この問題に対する解決策としてSILは、ある方言から別の方言へ、あるいは、ある言語から近似した別の言語へと、翻訳者たちが迅速に翻訳を適応させることを可能にする「アダプト・イット」(AdaptIt)と呼ばれるプログラムを開発してさえいることが知られている。しかし、興味深いことにSILは、新約聖書が翻訳されるべき方言数の増加は、翻訳されるべき言語数の増加を意味するとは捉えておらず、たとえばSILとBTA¹³¹が作成した、既に完成した、あるいは進行中の翻訳プロジェクトを示す地図は、シアネ/Sianeという一個の言語を挙げつつ、この言語の2つの方言が翻訳されたと記載している。同様に、ウンブ・ウング語/Umbu-Ungu¹³²も1つのプロジェクトとして挙げられているが、これも3つの方言への翻訳が為されたと記されている。これが示唆しているように、どうやらSILは、言語と方言との間に明瞭な境界を引き、使用者たちにとって「方言」が重要な社会文化的=社会指標的な意味を持つことを認識しつつ、あくまで「言語」を母語、魂の言語、離散的で神的・自然な、つまり神が与え給えた精神的・可算的な自然種(いわば、divine “natural kinds”)であると見なし、その使用者(民族言語の母語話者たち)を、母語化された聖書の福音によってキリスト教へと改宗させるという聖

なるプロジェクトに淫しているようである。

このような福音主義・プロテスタンティズム・近代ナショナリズムの言語実践・言語イデオロギーは、言語や方言は可算的ではなく、非離散的で不可算なものであるというテーゼ——方言学や社会言語学における言語やその変種（方言）についての理解——とは対立関係にある¹³³（小山、2012）。後者によれば、たとえば、方言学で用いられる等語線（isogloss; 言語威勢図で変異形の境界を表すもの）などが必ずしも「束」（bundle）とならないことが示すように、言語の境界と同様、方言の境界もまた、どうしようもなく曖昧なものである¹³⁴。

SIL／WBT：福音主義と構造言語学の邂逅

以上、SIL／WBTの組織的性格、活動、および、その言語イデオロギーについて一瞥した。以上を承けて、次に、SIL／WBTにおける福音主義と構造言語学との出会いについて概観する。

SILの創始者であるウィリアム・C・タウンゼント（William Cameron Townsend, 1896～1982年）は、グアテマラでの宣教活動や独裁者との連携を行った後¹³⁵、アメリカ合衆国へと帰郷し、当地のアカデミアで勃興しつつあった新たな科学としての構造言語学に着目する（Errington, 2008: 153-162）。彼は、厳密な構造分析の科学的な手続きが適切に習得・応用されれば、どんな宣教師によっても、そして、いかなる言語も書記化できるという、言語学者たちが一般に「料理本言語学」（cookbook linguistics）と揶揄する空想科学主義的な夢に憑かれ、この新興科学を取り入れる。そして、この理念に依拠して、彼がキャンプ・ウィクリフ（Camp Wycliffe）と呼び、後にSIL（Summer Institute of Linguistics）へと改名される組織において、宣教師たちを訓練し始める。

実際、タウンゼントはエドワード・サピアと接触を持ち、後者の「音素（音類型）の心理的実在性」の理論に触発されて「心理音素」（psychophonemic）法を考案したりしている。当時イェールにいたサピアの下で自ら学ぶという誘いは断ったものの、自身の愛弟子・協力者の1人、ケネス・パイク（1912～2000年）をミシガンへと送り¹³⁶、そこでパイクはサピアの教鞭に接する機会を得る¹³⁷。さらに、言語を科学的に分析する技術（＝構造分析）を習得すれば、聖書の翻訳、神のことばのさまざまな土着語＝民族語＝母語への翻訳が容易にな

るという教条に魅せられたタウンゼントは¹³⁸、パイクに次いで、SILの構造言語学者であり翻訳研究の重要人物ともなるナイダを、構造言語学の科学の園であるミシガン大学へと送り込むことになる。

SILは、1930年代に設立され1942年に法人化されたため、「教会成長」(church growth)と呼ばれる宣教運動の流れに属する組織より古参となるが、後者と多くの成員や目的を共有していた。すなわち、SILが言語を、真正な改宗のための鍵と捉える一方、教会成長運動は、布教の対象となる地域の社会文化構造を、乗り越えるべき障害としてではなく、キリスト教への改宗において活用されるべきものと見なしている。したがって、両者とも、真正なる回心・改宗への鍵として、地域の生活において示される(言語あるいは社会文化)構造を捉えているのである。言語翻訳・文化翻訳によって、キリスト教の(普遍的とされる)メッセージ=福音が、地域の言語(や行動)の示す言語構造(あるいは社会文化構造)へと適合的に埋め込まれる時——同化=馴化される、つまり収束的に適応される時——、そのメッセージ=福音の伝達は、メッセージの受け手たちの言語構造・社会文化構造の外へと彼ら彼女らを強制的に追いやる布教の手法よりも、遥かに、より成功裡に達成されるという考えが、これらの運動に共通して見られる思想となっている。

このような翻訳をとおして、宣教師が「部族言語=社会文化=心のうちに入り込むこと」により、キリスト教の布教が驚異的な成長を遂げるのだと信じられ、また(SILが焦点を据えた)言語であれ、(教会成長運動の諸組織が焦点を据えた)社会文化であれ、「ネイティヴ/先住民」についての科学的な研究が——したがって、言語学や社会文化人類学が——宣教の成功の鍵を握っていると見なされていた。そして、そのため、教育を要するのは先住民ではなく、宣教師が先住民からその言語や社会文化の構造を学ぶ必要があると考えられたのである。福音主義の世界の中では、教会成長運動は1970年代までには主流派となっており、その主要な原理のいくつかは、エキュメニカル運動の世界的組織である世界教会評議会(World Council of Churches)に対する保守主義的なキリスト教の応答としてビリー・グラハムによって招集され、その後の福音主義キリスト教の展開に多大な影響を与えたローザンヌ誓約(Lausanne Covenant)を採択したことで広く知られる1974年の第1回ローザンヌ世界伝道国際会議(First

International Conference on World Evangelization, a.k.a. Lausanne Congress) で是認されている。重要なことに、ナイダは、組織的にも思想的にも、教会成長運動の指導者たちと SIL との連結に貢献する役割を果たしている。ナイダは当初、メキシコで SIL の成員として活動を行っていたが、その後、合衆国に戻り、アメリカ聖書協会¹³⁹ (American Bible Society) の機関誌主筆を勤めるなど、長期にわたって指導的地位にあった¹⁴⁰。

ナイダの研究業績は構造言語学のみならず、言語人類学ともその対象領域が重複するような文化研究も射程に収めたものであった。たとえばナイダは、布教活動に従事するために海外に向かう直前の宣教師たち向けの、当時はかなり新しい分野であった人類学の手引き書 (初等入門書) である『慣習と文化¹⁴¹』などを著しているが、当該書は、神話、儀礼、社会組織など、20世紀中葉の人類学において重要と見なされていたトピックのいくつかを扱い、先住民たちの奇妙で理不尽に見える行動が、彼ら彼女らの文化の全体的な構造のコンテクストに置かれると、いかに理に適った、納得がいくものになるか¹⁴²、実際、愛や慈愛のようなキリスト教の概念を表すものとなるか、を論証・例証しようとしている (Handman, 2015: 68-70)。ナイダの友人であった言語人類学者パイクが造語した用語を用いれば、「イーミック」(emic) な視点を重視する、このメッセージ——いわば一種の人類学的福音ともいえるメッセージ——は、ナイダの他の著作、たとえば1972年に成瀬武史による邦訳 (『翻訳学序説』開文社) も出ている *Toward a Science of Translating, with Special Reference to Principles and Procedures Involved in Bible Translating* (1964; Leiden: Brill) などにも、看取されるものとなっている¹⁴³。